

フランスの家族をめぐる状況の変化と出生率

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

前回の SRI 業界コメントでは、フランスの出生率の高さを支える様々な施策、特に経済的なサポートについて紹介しました。フランス人は「心は左に、財布は右に」とよく言われます。思想的には左翼で進歩的でも、いざ経済的なことになると保守的だということです。

実は、フランスの出生率の伸びと、婚姻関係にない両親から生まれる子供の数の伸び率が、相関関係にあると言われています。現在、フランスでは、シングルマザーや法律的な婚姻関係にないカップル、またその間に生まれた子供に対する社会的な差別は全くないと言ってよいそうです。それどころか、税制上、法律的に婚姻関係のないカップルの間に生まれた子供に対する手当の方が有利になっているので、どうせ子供を持つなら結婚しない方が得だということらしいのです。

国全体として家族を支える、しかしその家族のあり方は革命的に(?) 多様である、というのが今のフランス社会かもしれません。フランスでは、1968年にパリ大学のソルボンヌ校で始まった学生の運動、いわゆる5月革命以降、社会意識が全く変わったと言われます。そして、フランスという国は、1789年のフランス革命、1800年代の共和制と王制をめぐる革命、そして1968年の5月革命と、1世紀に1つは大きな社会変革を迎えてきました。

そのような長いタイムスパンで見た時、フランスの家族をめぐる状況の変化と出生率の上昇は、何か21世紀を画する、巨大なシステムの変化の、さきがけであるのかもしれないね。